

ソーマ祭の動物供犠における 殺生行為と解釈について

伊澤 敦子

ヴェーダ祭式における犠牲獣の殺生に関する記述は、文献によって微妙に異なっているが、ブラーフマナ文献の時代になるとたとえ祭式の為の殺生といえども、必ずしも肯定的には捕えられておらず、殺生に関する直接的な表現を避ける傾向にあるとされている¹。

しかし、以前アグニチャヤナにおける動物供犠について、黒ヤジュールヴェーダの諸 Saṃhitā と白ヤジュールヴェーダ Śatapatha Brāhmaṇa を比較検討した際に、意外にも後者の方が前者に比べて動物を殺生する行為の描写が露骨であり、それは解釈に関係していると結論するに到った²。

ところで、動物供犠と言えば独立した祭式として、毎年雨季に举行される Nirūḍhapaśubadhha があるが、そのモデルとなっているのがソーマ祭に行われる動物供犠であり、上記の諸 Saṃhitā と ŚB にその記述を求めることができる。

本論では、前半で再度アグニチャヤナの動物供犠を取り上げ、先に述べた結論に関して詳しく論拠を挙げる。そして後半ではソーマ祭の動物供犠における殺生行為と解釈について検証し、最後に2つの動物供犠を比較検討する。

1. アグニチャヤナにおける動物供犠³

アグニチャヤナにおける動物供犠では、5頭の動物（人、牛、馬、羊、

¹ Cf. Houben 1999, pp.115, 117, 118. Thite 1970, pp.152-156. Oertel 1994, pp. 1501-1547.

² Cf. 伊澤 2001, pp.18-29.

³ Taittirīya Saṃhitā (TS) 5.1.8, 5.5.1.1-5; Kāthaka Saṃhitā (KS) 19.8-9, 20.8;

ヤギ）が祭火壇に捧げられる。後に動物の頭部は切り取られ *ukhā* に入られて、5 層の祭火壇を積み上げる際に第 1 層の基底部に置かれる。

まず、諸 *Samhitā* は人の頭部の入手については言及しておらず⁴、5 頭の動物を殺して捧げることに関する記述は以下の 3 点に集約される⁵。
アグニ達の為に動物が捧げられる⁶。火を持って周囲を巡った後、それら動物は放たれる。

(TS 5.1.8.2, KS 19.8(9,3-7), KapS 30.6, MS 3.1.10(13,5-7))
プラジャーパティ の為の動物 (MS では 1 頭の動物) のみで祭式を終わらせる。

(TS 5.1.8.2, KS 19.8(9,7), MS 3.1.10(13,7))
一連の馬に引かれたヴァーユの為に (KS ではヴァーユの為の) 角なしヤギ (MS では白い動物、KS では白い角なしヤギ) が捧げられる。

(TS 5.5.1.1, KS 19.8(9,12), MS 3.1.10(13,11-12))

この様に、各 *Samhitā* は表現に多少の違いはあるものの、内容は一致しており詳細な描写はない。

一方 ŚB には動物を殺し捧げる順番の説明があり、それによれば一番最

Kapīṣṭhala-Kaṭha *Samhitā* (KapS) 30.6-7, 31.10; Maitrāyaṇī *Samhitā* (MS) 3.1.10, 3.2.7; Śatapatha Brāhmaṇa (ŚB) 3.1.3.1-2, 6.2.1.1-39, 6.2.2.1-40.

cf. 井狩 1976, pp. 951-943.

⁴ 人の頭部の入手方法について BŚS は戦場で殺されたヴァイシャと馬の頭部を使うようにと指示し (BŚS(1)10.9(8,6-8))、MŚS には稲妻か矢で死んだヴァイシャかクシャトリヤから打ち落とした頭部を運んで来るようにとある (MŚS 6.1.2.23)。5 頭の動物を殺して捧げることに関しては、Śrauta Sūtra 間で異なるばかりでなく、同じ Śrauta Sūtra の中でも幾つかの選択肢が設けられている。MŚS では 5 頭 (プラジャーパティの為にヤギを、アグニ、願望の為に馬、牛、羊、ヤギ) 全てを捧げるか、4 頭の動物は外に放してそこで殺し頭部を切り落としてから、胴体と舌を水たまり (*hrada*) に投げ捨てて、プラジャーパティの為にヤギのみで祭祀を完了させるか、或いは、ヴァーユの為に 5 頭全てか角なしの白ヤギのみを捧げる (MŚS 6.1.3.1, 8, 10, 11, 12)。BŚS ははじめにヴァーユへの動物供犠を行うと告げ、賭博をし牛、羊、雄ヤギを煮ると述べる (BŚS(1)10.9(8,6-8))。

⁵*agnībhyah paśūn ā labhate kāmā vā agnāyaḥ kāmān evāva runddhe*.....
(TS 5.1.8.2)

初に殺される動物は人間である。

①

púruṣaṃ prathamám ālabhate/ púruṣo hí prathamáḥ paśūnām áthāśvaṃ púruṣaṃ hy ánu áśvó 'tha gām áśvaṃ hy ánu gáur áthāviṃ gām hy ánu ávir áthājam áviṃ hy ánu ajás tát enān yathāpūrvām yathāśreṣṭhām ālabhate// (ŚB 6.2.1.18)

先ず人を捧げる。人は諸動物のうちで第一のものなので。次に馬を。馬は人の後に続くので⁷。次に牛を。牛は馬に続くので。次に羊を。羊は牛に続くので。次にヤギを。ヤギは羊に続くので。そのようにそれらを順序通り優れたもの順に捧げる。

また、同じ白ヤジュールヴェーダに属す KSS の以下のような記述は注目す

.....yát pa śún ālabhate tenaivá paśūn áva runddhe yát páryagnikṛtān utsrjāti śīrṣṇām áyātayāmatvāya prājāpatyēna sám sthāpayati.... (TS 5.1.8.3)

....vāyáve niyútivate tūparám ā labhate.... (TS 5.5.1.1)

athaite 'gnibhyaḥ kāmabhyaḥ paśava ālabhyante kāmā vā agnayas sarvān evaitaiḥ kāmān abhijayati sarvān kāmān sprṇoti (KS 19.8(9,3-4), KapS 30.6)

yat paśūn ālabhate tenaiva paśūn avarunddhe yat paryagnikṛtān utsrjati śīrṣṇām ayātayāmatvāyakena samsthāpayati (KS 19.8(9,6-7))

yat paśūn ālabhate tenaiva paśūn avarunddhe | yat paryagnikṛtān utsrjati śīrṣṇām ayātayāmatvāya (KapS 30.6)

athaiṣa vāyavyaś śvetas tūparas sarvān vā eṣa paśūn pratyālabhyate (KS 19.8(9,12))

agnibhyaḥ || iti kāmāyālabhyante yát kāmo bhāvati sám hāsmāi sá kāmo namaty āprīṇanti yajñīyān evainān médhyaṇ kurvanti páryagnikṛtān útsrjanty áyātayāmatvāyakena sámsthāpayanti yajñāsya sámratyā ávichedāya (MS 3.1.10(13,5-7))

śvetām vāyáve niyútivatā ālabheta (MS 3.1.10(13,11-12))

⁶ TS ではアグニ達とカーマ達が等置されており、KS と KapS ではアグニ達の為に、カーマ達の為にとになっている。MS ではカーマが単数で、カーマの為に。

⁷ Cf. Oertel 1994, pp.1507-1508.

べきである。

②

parivṛte puruṣasaṃjñāpanam /14/ ...vaiśyaḥ puruṣo rājanyo vā /17/ kaṇṭheṣu trṇam antardhāya śirāṃsy ādatte /18/ (KŚS 16.1.14, 17, 18)

(14) 囲いの中で人を同意させること（殺し）が（行われる）⁸。(17) 人はヴァイシャカクシャトリヤ。(18) 首に草の葉を当てて頭部を取り除く。

しかし KŚS は同時に以下のような選択肢を設ける。

③

anyāni vā hiraṇyamayāni vā mṛṇmayāni vā anālabhyaitān /32/ (KŚS 16.1.32)

(32) 或いは他のもの⁹。(33-35) これらが手に入らない場合は、金か土で作った物でよい。

これに対し、ŚB は他の方法（動物供犠以外の方法）で殺した動物や金や土で作った代用物の使用を禁じ、できる限り 5 頭の動物を捧げること、それはプラジャーパティによって始められ Śyāparṇa Sāyakāyana に至るまで続けられてきたが、ŚB 当時はプラジャーパティの為のヤギと、ヴェーユの為のヤギの 2 頭だけしか捧げられなくなった、と述べる。

⁸ Cf. Oertel 1994, pp.1506-1507.

⁹ Sāyaṇa は ŚB 6.2.1.37 に対する注釈の中で KŚS 16.1.32 にふれ、*anyāni* を、*sañjñāpanahatāni pañca paśuśiṣṇāni dadhyāt; atha vā tatpratidinidhitvena*（同意の上殺された 5 頭の動物の頭を置くのが良い。或いはその代わりであることとして）と説明する（ŚB(2) vol. 3, p.1454）。

④

*tād dhaīke/īty evaitāni paśuśīrṣāṇi vittvópadadhaty ubháyenaité
 paśáva iti té ha té mártvyāḥ kuṇāpāḥ sambhavanty ánāpṛitāni hí
 tāni tād dha tátāḥśāḍheḥ sauśromateyásyópadadhuḥ sá ha kṣiprá
 evá táto mamāra//37// hiraṇmáyaṇy u haīke kurvanti/
 amṛteṣṭakā iti vādantas tá ha tá anṛteṣṭakā ná hí tāni
 paśuśīrṣāṇi//38// mṛṇmáyaṇy u haīke kurvanti/ útsannā vā eté
 paśávo yád vái kiṃcotsannam iyāṃ tásya sárvasya pratiṣṭhá tād
 yátraité paśávo gatās táta enān ádhi sámbarāma iti ná tátāḥ
 kuryád yó vā etéṣāṃ āvṛtaṃ ca brāhmaṇaṃ ca ná vidyāt tásyaitá
 útsannāḥ syuḥ sá etān evá páñca paśún ālabheta yāvad asyá váśaḥ
 syāt tán haitān prajāpatiḥ prathamá ālebhe śyāparṇaḥ
 sāyākāyanò 'ntamó 'tha ha smaitān evāntareṇālabhanté
 'thaitārḥimau dvāv evālabhete prajāpatyás ca vāyavyās ca táyor
 áto brāhmaṇam udyate//39// (ŚB 6.2.1.37-39)*

(37) さて、ある者達は正にこうしてこれら動物の頭を入手して置く。「どっちにしてもこれらは動物なのだ」と（考えて）。だが、彼ら人間達は死骸となってしまう。それらは喜ばされていないので¹⁰。実にそのように彼らが Āṣāḍhī Sauśromateya の為に置いた。彼はその後すぐ死んでしまった。

(38) ある人々は黄金製のものを作る。「不死のレンガである」と言いつつ。だが、それらは偽のレンガ。それらは動物の頭ではないので。

(39) ある者達は、土製のものを作る。「これらの動物は実に朽ち滅びたものである。実に朽ち滅びたもの全てにとってこの大地は拠り所である。従って、これらの動物が行った所から私達はこれらを集める」と。そのようにすべきではない。実にこれらに関するやり方と解釈を

¹⁰ Sāyaṇa によると、*prayājair asaṃskṛtatvāt* (ŚB(2) vol. 3, p.1454)。予備祭 (*prayāja*) において、Āpri 讃歌が唱えられる。Cf. Bosch 1985, p.96, p115 n.1. Schwab 1886, pp.90-91.

知らない者にとってこれらは朽ち滅びたものとなるだろう。彼は自分で可能な限りこれら5頭の動物を捧げるべし。実にそれらをプラジャーパティが最初に捧げた、Śyāparṇa Sāyakāyana が最後に。そしてその間それらを人々は捧げたのだ。そして今ではこれら2頭のみが捧げられる。プラジャーパティのためと、ヴァーユのためと。これらについての解釈は以下に述べられる。

この様に、動物の入手について、KŚS はいくつもの選択肢を設けているが、ŚB はその同じ選択肢を悉く否定しているのである。

ŚB では6.2.1.1以降でプラジャーパティを主人公にして動物供犠の意味と目的が語られているが、その中で、動物の頭部と胴体の分断と結合について以下のような展開が見出される。

⑤

sá aikṣata/ yā vai śrīr abhyádhasiṣam¹¹ imās tāḥ śrśāsu hanta śrśāṇy evōpadādā itī sá śrśāṇy evōtkṛtyōpādhattāthetarāṇi kūsindhāny apsú prāplāvayad ajēna yajñāṁ sāmasthāpayan nēn me yajñō víkrṣtō 'sad ity ātmā vai yajñō nēn me 'yām ātmā víkrṣtō 'sad ity etēna paśūneṣṭvā tát prajāpatir apaśyad yāthaitāsyāgnér antaṁ ná paryait//7// sá aikṣata/ yām imām ātmānam apsú prāpiplavaṁ tām ānvichānīti tām ānvaicchat tát yād eṣām apsú prāviddhānām pratyatiṣṭhat tá apāḥ sāmabharad átha yād asyām tām mṛdaṁ tát ubháyaṁ sambhṛtya mṛdaṁ cāpās céṣṭakām akarot tasmād etád ubháyaṁ iṣṭakā bhavati mṛccāpās ca//8//.... tát yās tāḥ śríyah/ etāni tāni paśuśrśāny átha yāni tāni kūsindhāny etās tāḥ pāñca cītayas tát yāt paśuśrśāny upadhāya cītīs cinóty etaír evá táchīrśābhīr etāni kūsindhāni sāmādhātī//11// (ŚB 6.2.1.7, 8, 11)

¹¹ ŚB(2) vol. 3, p.1440 では、*abhyadhyāsiṣam*。

(7) 彼（プラジャーパティ）は考えた。「私が念想したこれらの吉祥は頭部にある。よし、私は他ならぬ頭部を置こう」と。彼は他ならぬ頭部を切り離し置いた。そして残りの胴は水に浮かせた。雄ヤギ（を捧げること）で祭式を完結させた。「私の祭式が引き離されないように」と。祭式は実に胴体。「私のこの胴体が引き離されないように」と。この動物によって（神々を）まつた後、プラジャーパティは観た。このアグニの終わりにたどり着かなかったことを。

(8) 彼は考えた。「私が水に浮かせたこの胴体を探そう」と。彼は探した。水に投げられたこれらの（ある物は水に）しっかり立っていた、その水を集めた。そしてこの（大地にしっかり立っていた）その粘土を集めた。粘土と水の両方を集めてレンガを作った。それ故、レンガはこれら両方から成る、粘土と水と。

(11) これら吉祥はそれら動物の頭部。そしてそれら胴体はこれら（祭火壇）の5層。動物の頭部を置いて祭火壇を積むことで、即ち、胴体をこれら頭部に結合させる。

この様に、ŚBにおいては、動物の胴体を水に投げ入れ、その水と粘土からレンガを作って積むという行為が、動物の頭と胴体との結合という結果に導くという観点から重要な意義を持つのに対し、Saṃhitāでは頭部を保持することの意味や重要性について等閑に付されており、水の中に胴体を投げ入れるという行為の記述も胴体と頭部の結合という概念も見出せない。

黒ヤジュルヴェーダ系 Śrauta Sūtra は、人の頭部の入手について具体的に語るが、それは戦場で殺されたヴァイシャと馬、或いは稲妻か矢で落命したヴァイシャかクシャトリアから打ち落とした頭部を使用するというものであった。この方法はより穏当で信憑性に富んでいるだけに、実際に通用していたことを窺わせる。他方、ŚBとKŚSは殺し方について具体的に叙述し、実際にこの祭式の為に人をあやめた事実も示唆する。しかしまた、KŚSは本物の頭部を調達出来なければ、金か土で作ったものや、動物供犠を行わずに得たものを使うことを許可しており、この説は実際に

採用されていたことが予想される¹²。では、何故 ŚB はこれを否定するのか？ それは祭式で本物の頭部を使用すると印象づける為であり、頭部を使用することの重要性や頭部の意味するところを説く為、また頭部と胴体の結合と言った概念をより効果的に示す為に必要だったからであろうと考えられる。また、この概念は、瓦解したプラジャーパティの体の復元という ŚB に特有と言われる思考を反映している¹³。

2. ソーマ祭における動物供犠¹⁴

ソーマ祭の動物供犠はソーマ搾りが行われる前日に举行される。祭柱が立てられそこに犠牲獣が縛られて殺される。その後大網膜（*vapā*）が取り出され献供され、次に聖餅（*paśupuroḍāṣa*）が捧げられ、更に犠牲獣の体が切り分け献供される¹⁵。

まず犠牲獣が殺される部分について見てみる。

⑥

*ātha pūnar étyāhavanīyam abhyāvṛtyāsate/ néd asya samjñapyā-
mānasyādhyakṣā āsāmēti tāsyā na kūṭena prāghnanti mānuṣām
hī tán no evā paścātkarṇām pitṛdevātyam hī tād apigṛhya vaivā
múkham tamāyanti veṣkām vā kurvanti tan nāha jahī mārayēti
mānuṣām hī tāt sāmjñapayānvagann iti tād dhī devatrā sā
yād āhānvagann ity etārhi hy eṣā devān anugāchati tasmād
āhānvagann iti//15// (ŚB 3.8.1.15)*

(15) 次に、彼らはまた戻って来てアーハヴァニーヤに向かって坐る。

¹² BŚS 22.2(119.9) も金か土で作った頭部について言及する。

¹³ Cf. Oldenberg 1967, pp.319-334. Keith 1967, pp.cxxv-cxxxi. Eggeling 1988-2, pp.xiii-xxvii. 井狩 1875, p.53.

¹⁴ TS 6.3.6-11; KS 26.7-9; KapS 41.5-7; MS 3.9.5-8, 3.10.1-4; ŚB 3.7.3.9-46, 3.7.4.7-3.8.2.29, 3.8.3.1-37; Aitareya Brāhmaṇa (AB) 2.1-14; Kauṣītaki Brāhmaṇa (KB) 10.

¹⁵ Cf. Thite 1970, pp.143-145. Nirūḍhapaśubandha については、Dumont 1962, pp. 246-263 参照。

「我々がこの同意されつつあるものの目撃者にならないように」と。彼らはそれを金槌では殺さない¹⁶。何故なら、それは人間のため（のやり方）なので。耳の後ろでもない。何故なら、それは祖霊のため（のやり方）なので。彼らは正に口を塞いで窒息させるか、又はわなを作る。それで彼は言わない、「殺せ、死なせよ」と。何故なら、それは人間のため（のやり方）なので。「同意させよ、それらはついて行ってしまった」と言う。何故なら、それは神のため（のやり方）なので。彼が「それらはついて行ってしまった」と言うのは、これは今神々について行くからである。それ故、彼は言う、「それらは行ってしまった」と。

⑦

prthivyāḥ sampṛcaḥ pāhīti barhīḥ //2// upāsyaty āskandāyā-skannaṃ hí tād yád barhīṣi skāndaty átho barhiṣádāṃ evāinaṃ karoti párañ ā vartate 'dhvaryúḥ paśóḥ saṃ jñapyámānāt paśúbhya evá tán ní hnuta ātmánó 'nāvraskāya gáchati śríyam prá paśūn āpnoti yá evāṃ véda//3// (TS 6.3.8.2-3)

(3)「大地との接触から守れ」と唱えつつ、祭筵を下に投げ置く。こぼれないように。何故なら、祭筵にこぼれるものは、こぼれたことにならないので。そしてまた、それを正に祭筵の上にすわるものとする。アドヴァリュウは同意させられつつある犠牲獣から顔をそむける。即ち、その様にして犠牲獣たちに謝罪する¹⁷。胴が切り落とされないように。その様に知る者は、吉祥に赴く。家畜を得る。・・・

⑧

átha paśúm ālabhante skāndati vā etád dhavír yád viścótati yád

¹⁶ *kūta* は front bone（前頭骨）とも訳されるが（Cf. Eggeling 1988-1, pp.189-190）、ここでは金槌と訳す。Cf. Schmit 2000, p.17, n.1.

¹⁷ Cf. Gotō 1987, pp.351-352. Weber 1973, p.317.

*vilipyáte yát tr̥ṇam upāsyaty áskannatvāya pratyāñcam
sámjñāpayanti pratyāñco hí paśávo médham upatíṣṭhanta
udīānapādam vyāvrttyai* (MS 3.9.7 (126,14-17))

次に彼らは動物を捧げる。実に（血が）飛び散る時、ぬりつけられる時、この供物（犠牲獣）はこぼれてしまう¹⁸。草を下に投げ置くのはこぼれないように。西向きで同意させる¹⁹。何故なら、動物達は西向きで祭祀に臨むので。足は北に向けて。区別の為に。

この様に、ŚB は窒息させるという具体的な方法を明示するが、TS と MS はその点に触れない。KS と KapS に到ってはその場面への言及がない²⁰。

さて、動物を死に到らしめた後にそれを水で清める²¹。

⑨

*átha yát pátny upaspr̥śāti/ yóṣā vái pátnī yóṣāyai vā imāḥ
prajāḥ prajāyante tād enam etásyai yóṣāyai prájanayati tásmāt
pátny úpaspr̥śati//5//* (ŚB 3.8.2.5)

次に妻が（水に）触れるのは、妻は女性、実に女性からこれら生類は生まれる。そうすることでこの女性からこのものを生まれさせるのである。それ故、妻は（水に）触れる。

⑩

átha yá āpaḥ pariśiṣyānte/ ardhā vā yāvatyo vā tábhir enam

¹⁸ Cf. Schmidt 2000, p.20.

¹⁹ Cf. Oldenberg 1967, p.1067.

²⁰ MŚS 1.8.3.30, ĀpŚS 7.16.5, BŚS 4.6(117,17); 頭を西に足を北にした動物を殺す (*sámjñāpayati*, BŚS のみ *nighnanti*)。

KŚS 6.5.25-28; (25) そこで、頭を西に足を北にしたこれ（動物）を殺す (*nighnanti*)。 (26) 又は頭を東にして。 (27) （動物の）口を押さえ、鳴き声を上げないようにし、窒息させる。 (28) 又はわなによって。

²¹ KS と KapS には対応箇所がない。 Cf. Keith 1967, part 1, p.lxii.

yájamānās ca śīrṣatō 'gré 'nuṣīncatas tát prāṇāṁś caivāsmīms tát taú dhattas tác cainam átaḥ sámīrayataḥ//7// (ŚB 3.8.2.7)

次に残った水の半分か又は全てで祭主と（もう 1 人）が²²、頭から始めてそれに水を振り掛ける。即ち、彼等はその様にそれに諸プラーナを置く。そしてその様にそこからそれを生き返らせる。

⑪

...paścāllokā vā eṣā prācy udānīyate yát pátnī námas ta ātānēty āhādityāsya vái raśmāyaḥ//3// ātānās tébhya evá námas karoty anarvā prēhīty āha bhrátṛvyo vā árvā bhrátṛvyāpanuttyai ghrtāsya kulyām ánu sahá prajāyā sahá rāyās póṣeṇēty āhāśśam evaítām ā śāsta āpo devīḥ śuddhāyuva ity āha yathāyajúr evaítāt//4//

paśór vā ālabdhasya prāṇāñ chūg ṛchati vāk ta ā pyāyatām prāṇás ta ā pyāyatām ity āha prāṇébhya evāsya śúcāṃ śamayati śā prāṇébhyo 'dhi pṛthivīm śúk prá viśati sám āhobhyām iti ní nayati ahorātrābhīyām evá pṛthivyāi śúcāṃ śamayaty óṣadhe trāyasvainam svádHITE maínam himsīr ity āha vājro vái svádhitīḥ //1// śāntyai (TS 6.3.8.3-9.2)

(3)西側に世界を持つ妻であるこの者は東方に導かれる。「あなたに敬意を表す、広がるものよ」と言う。広がるものとは実に太陽の光線。

(4) 即ち、彼らに敬意を表する。「前進して行け。遮りを持たないものよ」と言う。遮られるものとは実に敵。敵の排除の為に。「溶かしバターの流れに沿って、子孫と共に、富の増大と共に」と言う。即ち、この願いを祈願する。「水よ、女神達よ、清浄を目指す者達よ」と言う。これは即ち祭句通り。

²² 祭主以外のもう一人は、妻か或いはアドヴァリユウ祭官。Cf. Eggeling 1988-1, p.192 n.1. Dumont 1692, p.248.

(1) 実に動物が捧げられた際に、痛みが諸プラーナに達する。「あなたの語が膨らむように。あなたのプラーナが膨らむように」と言う。即ち、このものの諸プラーナのために痛みをしずめる。その痛みは諸プラーナから大地に入る。「昼双方（昼夜）に幸いあれ」と、下に注ぐ。即ち、昼夜によって大地の為に痛みをしずめる。「草よ、それを守れ。斧よ、それを傷つけるな」と言う。斧は実に雷電。しずめの為に。

⑫

*adbhyó vai prajāḥ prajāyante pātnī prājanayati yád adbhir
abhiṣīncāti pūnar evaīnam prājanayati sārvaṇ prāṇānt sámṃrṣati
sārvāṇy āṅgāny etāvān hí paśūḥ paśór vai mār्याmāṇasya
prāṇāñ sūg ṛchati yád āha vācam asya mā himsīḥ prāṇām asya
mā himsīr ity adbhir vāvāsyaitāt prāṇāñ śucó muñcati (MS 3.10.1
(128,9-12))*

実に水から生類は生まれる。妻が産む。水を注ぐことで、即ち、再びそれを生じさせる。全てのプラーナに触れる。全ての四肢に。動物はそれ位なので。実に殺されつつある動物の諸プラーナに痛みが達する。「この語を傷つけるな。このプラーナを傷つけるな」と言うのは、実にこの様に水でこれの諸プラーナを痛みから解放する。

いずれのテキストでも、祭主の妻が清めを行うのだが、その意味解釈については相違が見られる。ŚB は妻が女性である点を指摘し誕生と結び付けるが、TS は専ら痛み除去という点のみを問題にする。ここで MS が両者の説をとнаえていることは興味深い。

大網膜を献供してから聖餅を献供するがそれについては、

⑬

*yaddevátyaḥ paśúr bhāvati/ taddevátyaṃ puroḍāśam anuní-
rvapati tād yāt puroḍāśam anunirvāpati sārveṣāṃ vā eṣā paśū-*

*nām médho yád vr̥hiyaváu ténaivānam etán médhena
sámardhayati kṛtsnām karoti tásmāt puroḍāśam
anunír vapati//1//* (ŚB 3.8.3.1)

動物が神格とするその同じ神格に聖餅をその後で撒き出す。聖餅をその後で撒き出すのは米と麦は実に全ての動物の真髓²³、即ち、この様にそれにその真髓を十分に備えさせる、無欠にする。それ故、聖餅をその後で撒き出す。

⑭

*paśúm ālābhya puroḍāśam nír vapati sámmedham evānam ālabhate
vapāyā pracārya puroḍāśena prā caraty ūrg vai puroḍāśa ūrjam
evā paśūnām madhyatō dadhāty átho paśór evā chidrām āpi da-
dhāti.....* (TS 6.3.10.1)

動物を捧げてから、聖餅を撒き出す。即ち、真髓と共にこれを捧げる。大網膜での（献供）を行ったら、聖餅での（献供）を行う。聖餅は実に滋養²⁴、即ち、滋養を動物達の真ん中に置く。そしてまた動物の穴をふさぐ。・・・・

⑮

*yád vr̥himáyaḥ puroḍāśo bhávati madhyatō vā etát paśór médho
dhīyate suśiró vai tárhi paśúr yārhi vapām utkhidānti yád
vr̥himáyaḥ puroḍāśo bhávaty āpihityā āsuṣiratvāya
dvādaśakapālo bhavati dvādaśa māsāḥ saṃvatsaráḥ
saṃvatsarām ānu paśávaḥ prājāyante prajānanāya* (MS 3.10.2
(131,11-15))

米でできた聖餅であることで、実に動物の真ん中にこの様に真髓が置

²³ Cf. MS 3.10.2(131,6-11), KS 31.10(12,4-5), AB 2.8.1-7, 2.11.12.

²⁴ Cf. 永ノ尾 1989, pp.30-34.

かれる。彼らが大網膜を切り取り出すと動物は実に空になる。米でできた聖餅が用いられるのはふさぐ為、空でなくする為。12のかわれけで（焼いた聖餅が）用いられる。1年は12ヶ月。1年後に動物は生まれる。出産の為に。

TS においては真髓（*medha*）である聖餅を撒きだすことは、大網膜を取り除かれた後の動物に滋養（*ūrj*）を置くことを意味する。他方 ŚB は更に進んで聖餅を撒きだすことで動物を真髓で漲らせ、無欠（*kr̥tsna*）にすると説明する。ここで注目すべきは、MS のみが12のかわれけと12ヶ月を結びつけ、誕生・出産の概念を導き出していることである。

その後の溶かしバターを注ぐ行為については、

⑩

*sá hṛdayam evāgré 'bhídhārayati/ ātmā vai máno hṛdayam
prāṇāḥ prṣadājyām ātmāny evaitān mánasi prāṇām dadhāti
tāthaitāj jīvām evā devānām havír bhāvaty amṛtam amṛtānām
//8// (ŚB 3.8.3.8)*

彼はまず最初に心臓に（バターを）注ぐ。心臓は実にアートマン²⁵、意。凝乳入り溶かしバターはプラーナ。即ち、アートマン、意にこの様にプラーナを置く。その様にこれは神々の正に生きた供物となる、不死者達の不死（の供物となる）。

⑪

*prāṇāpānau vā etaú paśūnām //1// yāt prṣadājyām paśóḥ khálu
vā ālabdhasya hṛdayam ātmābhí sám eti yāt prṣadājyēna
hṛdayam abhighārāyaty ātmānn evā paśūnām prāṇāpānau
dadhāti paśúnā vai devāḥ (TS 6.3.10.1-2)*

²⁵ この場合の *ātman* は魂、自身という意味であろう。Cf. Arbman, pp. 108, 119, 144, 162 n.1.

凝乳入り溶かしバターは実に動物達のこれらプラーナとアパーナ。実に動物が捧げられた際に、アートマンが心臓にやって来る。凝乳入り溶かしバターを心臓に注ぐのは、即ち、動物達のアートマンにプラーナとアパーナを置く。・・・・

⑱

prāṇāpānāu vāi prṣadājyām ātmā hṛdayam yāt prṣadājyēna hṛdayam anākti madhyatō vā etāt paśōḥ prāṇāpānāu dadhāti (MS 3.10.2 (132,6-8))

凝乳入り溶かしバターは実にプラーナとアパーナ。心臓はアートマン。凝乳入り溶かしバターを心臓に塗るのは、実に、動物の真ん中にこの様にプラーナとアパーナを置く。

いづれのテキストにおいても凝乳入り溶かしバターはプラーナあるいはプラーナ・アパーナと見なされるが²⁶、はっきりと不死の概念を述べるのは ŚB にのみである。また、同テキストによれば、大網膜の献供の際、祭匙に溶かしバターを塗りそこに黄金片、大網膜、更に黄金片を置き（ŚB 3.8.2.26）、更に動物の他の部分の献供の際にも祭匙に黄金片を置くが（ŚB 3.8.3.13）、黄金は不死の象徴である²⁷。

⑲

tād yād dhiraṇyaśakalāv abhīto bhāvataḥ/ ghnānti vā etāt paśūṃ yād agnau jūhvaty amṛtam āyur hiraṇyam tād amṛta āyuṣi prātitiṣṭhati tathāta údeti tathā sāmjīvati tasmād dhiraṇyaśakalāv abhīto bhavata..... (ŚB 3.8.2.27=3.8.3.26)

²⁶ 凝乳入りバターと等置されるのは、ŚB ではプラーナであるが、TS と MS ではプラーナとアパーナになっている。

²⁷ 黄金と不死の等置は、例えば ŚB 4.5.2.10, 5.4.1.12, 5.4.1.14 にも見出される。CF. Lévi 1966, p.164 n.3.

そこで両側に 2 つの黄金片があるのは、彼らが（屠殺し料理した動物を）祭火に献供すると動物を今の場合殺すことになる²⁸。黄金は不死、寿命。それで不死、寿命にしっかり立つ。その様にここから起き、その様に生き返る。それ故、両側に黄金片がある。・・・・

⑳

yád dhíraṇyam avadhāya juhóti hiraṇyajyotiṣam evānaṁ svargāṁ lokāṁ gamayati (MS 3.10.3 (134,3-5))

黄金を置いてから献供するのは、即ち、それを黄金に輝く天界に行かせる。

TS には黄金の記述がなく、MS も上に挙げた一例のみで、しかもそれは天界に結び付けられるにとどまる²⁹。

以上見てきたように、白ヤジュールヴェーダ系の ŚB と KŚS は動物を殺す場面を、比較的明確に描写するのに対し、黒ヤジュールヴェーダ系の Saṃhitā と Śrauta Sūtra は場面描写を回避する傾向にある。また、ŚB は水による清め、聖餅の献供、溶かしバターを注ぐこと、黄金片を置くこと、といった動物を殺した後の行為を動物の再生・不死と結び付けているが、Saṃhitā にははっきりとした再生・不死の概念は見出せない。

ここで 1 つ注目したいのは、MS の立場である。ソーマ祭の動物供犠に関して言えば、MS は ŚB と TS の間に位置しているかのようなのである。今回提示した箇所においては、テキストの㉔㉕㉖がこれに相当する。この点については更に検討する必要があるだろう。

2. まとめ

本稿では、アグニチャヤナ祭とソーマ祭における動物供犠について見て

²⁸ Cf. Jensen 1944, pp.36-39. Schlerath 1987, pp.195-197. Schmidt 1968, pp.646.

²⁹ 但し、Śrauta Sūtra 類には大網膜等を献供する際に黄金片を置くという記述がある (MŚS 1.8.4.32, 1.8.5.17, 1.8.5.25; KŚS 6.6.22-23, 6.8.10; ĀpŚS 7.20.6, 7.23.12, 7.24.9)。

きたが、いずれの場合も *Samhitā* よりも *ŚB* の方が殺生場面の描写が露骨であるということが明らかになった。また *ŚB* がその後の行為を犠牲獣の不死や再生に結び付けている点も共通していた。

従来、ブラーフマナ文献における犠牲獣の不死・再生という概念は、動物の殺生という事実を曖昧なものにし、死を死ではない、殺生を殺生でないと言いくるめる手段の例として挙げられてきた³⁰。しかしもしそうであるならば、*ŚB* が *Samhitā* に比べて、敢えて殺生の場面をはっきり示すのは何故なのか。*Samhitā* のようにその場面をあさりとやり過ごすことは可能だったはずである。この点に着目するならば、むしろ反対に、不死・再生の概念を強調する為に、殺生の事実を明示する必要があったのではないかと考える方が妥当であろう。

時代と共に祭式の為の殺生は行われなくなり、祭式そのものも *Prāṇāgnihotra* のような実際の祭火も供物ももはや存在しないものへと移行していくが、その過程において新たな概念が主張される時、たとえそれが古からの祭式行為を韜晦する目的で生じたのだとしても、発展段階においても一度祭式行為に立ち返り時にそれを再浮上させる結果になるという事実は興味深い。

（略号および使用テキスト）

- | | |
|---------|---|
| ĀpŚS | The Śrauta Sūtra of Āpastamba, Vol. 1. Ed by R. Garbe. New Delhi 1983 (2nd ed.) |
| BŚS (1) | Baudhāyana Śrauta Sūtra in Agni. The Vedic Ritual of the Fire Alter, Vol. 2. Ed. by Frits Staal. Berkeley 1983. |
| BŚS (2) | The Baudhāyana Śrauta Sūtra, Vol. 1. Ed by W. Caland. New Delhi 1982 (2nd ed.) |
| KapS | Kaṣiṭhala-Kaṭha-Samhitā. A Text of the Black Yajurveda. Ed. by Raghu Vira, M. A.. Lahore 1932. |
| KS | Kāṭaka, die Samhitā der Kāṭha-Śākhā. Herausgegeben |

³⁰ Cf. Thite 1970, pp.155, 157. Schmidt 1968, pp. 631, 646. Heesterman 1984, P.119.

- von Leopold von Schroeder. Wiesbaden 1971.
- KŚS (1) Kātyāyana Śrauta Sūtra. Tr. by H. G. Ranade. Pune 1978.
- KŚS (2) The Śrautasūtra of Kātyāyana with extracts from the commentaries of Karka and Yājñikadeva. Ed by Albrecht Weber. The Chowkhamba Sanskrit Series 104. Varanasi 1972.
- MS Maitrāyaṇī Saṃhitā, die Saṃhitā der Maitrāyaṇīya-Śākhā. Herausgegeben von Leopold von Schroeder. Wiesbaden 1972.
- MŚS Mānava Śrauta Sūtra belonging to the Maitrāyaṇī Saṃhitā, Vol. 2. Tr. by J. M. Gelder. Sri Garib Dass Oriental Series, No. 31. Delhi 1985.
- ŚB (1) The Śatapatha Brāhmaṇa in the Mādhyandina-Śākhā with extracts from the commentaries of Sāyaṇa, Harisvamin and Dvivedaganga. Ed by Albrecht Weber. The Chowkhamba Sanskrit Series 96. Varanasi 1964.
- ŚB (2) The Śatapathabrāhmaṇa according to the Mādhyandina Recension with the Vedaraprakāśa Bhāṣya of Sāyaṇācārya supplemented by the Commentary of Harisvāmin, Vol.1 and 3. Delhi 1987.
- TS (1) Die Taittirīya-Saṃhitā. Zweiter Theil. Herausgegeben von Albrecht Weber. Indische Studien 12. Leipzig 1872.
- TS (2) The Taittirīya-Saṃhitā of the Black Yajurveda with the Commentary of Bhaṭṭa Bhāskara Miśra, Vol. 6-7. Ed. by A. Mahadeva Sastri and K. Rangacharya. Delhi 1986.

（参考文献）

- Arbman, E. [1927] “Untersuchungen zur primitiven Seelenvorstellung mit besondere Rücksicht auf Indien” *Monde Oriental* 21, pp.1-185.

- Van Den Bosch, L. P. [1985] “The Āprī Hymns of the Ṛgveda and their Interpretation.” *Indo-Iranian Journal* 28, pp.95-122, 169-189.
- Dumont, P-E. [1951] “The Special Kinds of Agnicayana (or Special Methods of building the Fire-Altar) according to the Kaṭhas in the Taittirīya-Brāhmaṇa, TB 3.10-12 with Tr..” *PAPS* 95-6, pp. 628-675.
- Dumont, P-E. [1962] “The Animal Sacrifice in the Taittirīya-Brāhmaṇa, The Part of the Hotar and the Part of the Maitrāvaruṇa in the Animal Sacrifice, TB 3.6 with Tr..” *PAPS* 106-3, pp. 246-263.
- Dumont, P-E. [1963] “The Human Sacrifice in the Taittirīya-Brāhmaṇa, TB 3.4 with Tr..” *PAPS* 107-2, pp. 177-182.
- Dumont, P-E. [1969] “The Kāmya Animal Sacrifices in the Taittirīya-Brāhmaṇa, TB 3.8 with Tr..” *PAPS* 113-1, pp. 34-66.
- Eggeling, J. [1988-1] *The Śatapatha Brāhmaṇa*, Part II. (The Sacred Books of the East 26.) Delhi.
- Eggeling, J. [1988-2] *The Śatapatha Brāhmaṇa*, Part IV. (The Sacred Books of the East 43.) Delhi.
- Eggeling, J. [1989] *The Śatapatha Brāhmaṇa*, Part III. (The Sacred Books of the East 41.) Delhi.
- Gotō, T. [1987] *Die “I. Präsentklasse” im Vedischen*. Wien
- Heesterman, J. C. [1967] “The Case of the Severed Head.” *WZKSO* XI, pp. 22-43.
- Heesterman, J. C. [1984] “Non-violence and Sacrifice.” *Indologica Taurinensia* XII, pp. 119-127.
- Houben, J. E.M. [1999] “To kill or not to kill.” In *Violence Denied*, pp.106-183. Leiden.
- Ikari, Y. [1989] “The Development of Mantras in the Agnicayana

- Ritual (1) -On the treatment of *hautra* mantras-.”
ZINBUN 24, pp. 1-11.
- Jensen, Ad. E. [1944] “Das Weltbild einer frühen Kultur.”
Paideuma, Band 3, Doppelheft 1/2, pp.1-83.
- Keith, A. B. [1967] *The Veda of the Black Yajus School entitled
 Taittiriya Sanhita* Part 2. (Harvard Oriental Series 19)
 Delhi.
- Lévi S. [1966] *La Doctrine du Sacrifice dans les Brâhmaṇas*.
 (Bibliothèque de l'École des Hautes Études, Volume
 LXXIII.) Paris.
- Oertel, H. [1994] “Euphemismen in der vedischen Prosa und
 euphemistische Varianten in den Mantrtas.” In *Kleine
 Schriften*, Teil II, pp.1501-1547. Stuttgart.
- Oldenberg, H. [1967] *Kleine Schriften*, Teil I-II. Wiesbaden.
- Schlerath, B. [1987] “*rākṣate śiraḥ* RV 9, 68, 4.” *Studien zur
 Indologie und Iranistik*, Heft 13/14, pp.195-201.
- Schmidt, H-P. [1968] “The Origin of Ahimsā.” In *Mélanges d’In-
 dianisme, a la Mémoire de Luis Renou*, pp.625-655. Paris.
- Schmidt, H-P. [2000] “How to Kill a Sacrificial Victim.” In
Makaranda (Madhukar Anant Mehendale Festschrift),
 pp.17-28. Ahmedabad.
- Schwab, J. [1886] *Das altindische Thieropfer*. Erlangen.
- Thite, G. U. [1970] “Animal Sacrifice in the Brâhmaṇatexts.” *NUMEN*
 17-2, pp.143-158.
- Tsuji, N. [1981] “The Agnicayana-Section of the Maitrāyaṇī-
 Saṃhitā with Special Reference to the Mānava-Śrauta
 Sūtra.” *Memoirs of the Research Department of the Toyo
 Bunko* 39, pp.125-148. Tokyo.
- Tull, H. W. [1996] “The Killing that is not Killing: Men, Cattle, and
 the Origins of Non-Violence (Ahimsā) in the Vedic Sacri-

- face.” *Indo-Iranian Journal* 39, pp.223-244.
- Weber, A. [1973] *Indische Studien*, IX. Hildesheim • New York.
- Weber, A. [1983] “Ueber Menschenopfer bei den Indern der vedischen Zeit.” In *Indische Streifen*, pp.54-89. Osnabrück.
- 井狩弥介 [1975] 「アグニチャヤナ祭式と古ウパニシャッド」『宗教研究』49-2, pp.51-73.
- 井狩弥介 [1976] 「Vāyavya-paśu (Baudh ŚS X. 9-11) 覚え書」『印度学仏教学研究』24-2, pp.951-943.
- 伊澤敦子 [2001] 「Agnicayana における動物供犠」『インド哲学仏教学研究』8, pp.18-28.
- 永ノ尾信悟 [1989] 「ブラーフマナ文献に見られる思考法」『インド思想 3』（岩波講座 東洋思想 第七巻), pp.30-48.
- 辻直四郎 [1982] 「ブラーフマナとシュラウタ・スートラとの関係」『辻直四郎著作集 第二巻』

Summary

On the Act of Killing: the Interpretation of Animal Sacrifice

Atsuko Izawa

In Brāhmaṇa-texts, the killing aspect of animal sacrifice is not fully acknowledged and it is only described euphemistically. However, while researching the issue of animal sacrifice of the Agnicayana, it was found that in the White Yajurveda-texts, slaying scenes are narrated more clearly than in the Black Yajurveda-texts. In the first part of this paper, detailed evidence for this contention is presented. In the second part, animal sacrifices included in the Soma sacrifice are analyzed, also using the same texts as the Agnicayana. It is concluded that in the case of both types of animal sacrifices, the slaying scenes are described more directly in the White Yajurveda-texts compared to the Black Yajurveda-texts. Moreover, sacrificial acts are explicitly connected with the victim's immortality and rebirth only in the Śatapatha Brāhmaṇa. Generally, in the Brāhmaṇa-texts, the concept of the victim's immortality and rebirth is regarded as a means of euphemistically sophisticating the killing element. However, the attitude of Śatapatha Brāhmaṇa towards killing suggests the opposite, that is, the killing act is stated more clearly in the Śatapatha Brāhmaṇa in order to emphasize the concept. Interestingly, in the process of sophisticating the ritual, certain ancient sacrificial acts are sometimes highlighted in order to assert new concepts.

*Researcher,
International Institute
for Buddhist Studies*